

The last Korczak boy／最後のコルチャック少年

過去は私から離れることなく、いつも一緒です。

私は、1923年にワルシャワで生まれました。

お父さんは、私が4歳のときになくなり、家には6人で住んでいましたが、生活は苦しく、とくにママにとってはつらいものでした。

私たちは、おじさんの家の一部を借りて住んでいました。

ママは、少々のお金を稼ぐのが精一杯で、それで私たちの世話をしたのです。

そのうち、ママはヤヌシュ・コルチャックの孤児院を見つけました。ママと二人でクロフマリナ92通りのそこへ行き、コルチャック先生に迎えられたのです。

先生は、二人を小さな部屋に連れて行き、そこでママとコルチャック先生は座りました。

でも、私のための席はありませんでした。

すると先生は、私を膝の上にすわらせ、上半身がちゃんと立つように抱きしめてくれました。

コルチャック先生はママと話しはじめました。そうするうちに、私は先生の顔を間近にじっと見はじめたのです。

私は、先生の小さなひげが好きになりました。それはブロンド色ですてきでした。

だからそのひげに手をのぼして、どんなものか確かめはじめました。

でも、先生は反応しません。

うん、もうこれでひげは…、ところで眼鏡がおもしろく見えました。

私は、それを透かしてママを見ようと、先生にもっと顔をよせて、頬をすり合わせるようにしてママを見ました。

でもそのとき、会話を終えたママが私にこう言いました。

「イッチャカレ、あんたはここに残って！ママは家に帰るのよ」

そのとき、私が泣いたのかは覚えていません。でも、手を取っているコルチャック先生が大好きになったのです。

ですから、「OK」とママに答えました。

そうしたら、ママは私にキスをし、私もキスを返すと、そのあとママは出て行きました。

あとでコルチャック先生は、私にこう言いました。「イッチャカレ、そのドアの後ろに君の上級生の男の子が待っている。その子が君の世話役で、ここのいろいろなルールを教えてくださいよ」と。

こうして私は生まれてはじめて世話役の上級生に、私を弟のようにしてすべてを教え、自分を守ってくれるものを見つけたのです。

私たちは、そこを孤児院と呼びませんでした。だって、孤児院とは感じなかったんです。

そこは、私たちの家だったんです。

そこには、二人の主軸の人がいました。その一人、コルチャック先生は総括的マネージャであり、もう一人のステファ・ヴァチンスカ女史はマネージャでした。

二人とも独身で、結婚はしていませんでした。

この二人の先生は、子どもの教育、特に孤児たちへの教育に投身していました。

ところで、私たち子どもは、コルチャック先生の役目は“お父さん”だと感じました。

だって先生は、いつもみんなと遊んでくれたからです。でも先生は、外でも働いていました。—大学の講師として。

ステファ先生は、いつも 24 時間、私たちと一緒にでした。つまり彼女は、すべての世話をしてくださったのです。

コルチャック先生は、外での仕事の後、どこのお父さんとも同じように、物語を話してくれたり、遊んだり、ゲームをオルガナイズしてくれました。

私たちは、8 時の学校に間に合うよう、朝は 6 時に起床しました。

その時は、こうです。

全員がナンバーを付けた自分のタオルと歯ブラシを持っていました。私のナンバーは 43 でした。すばやく顔を洗ったあと、みんな自分のベッドを直しました。それをしてくれる作業人がいなかったからです。

つまり、皆が自分の世話を自分でしました。そしてまた、この家の全部の世話もしました。

それから下の食堂に下りました。そこには、小さなテーブルの上に、小さなグラスに入った魚油がありました。<6:30>

そのテーブルの横に立ったコルチャック先生は、私にこう言いました。

「イチチャカレ、ほーらこのリストによると、君はこの魚油を飲まなきゃいかん」

それがほんとうに嫌な私は、オドオドしました。でも逃げ道はありません。お医者先生の先生がそう言うのですからそうしなければならないのです。

先生はこう言いました。

「やり方を教えてあげよう。まずそのグラスを持って脇に用意する。そして、パンの小片を取って塩につけ、それも脇に用意する。そして、鼻をつまむ」と言い、どうやるか示してくれた。「そしてグラスを取って中を飲み込んで、素早く塩付きのパンを口の中に放り込んで食べるんだ。ほーら、おいしかったらう」<7:53>

朝食は、われわれ子どもの手によって配られました。

7 時半ごろ、みんな着替えを終え、本の入ったバックを持って学校に行く準備ができました。

すると、ドアの横に待つステファ夫人が二つのバスケットの中から昼食用のサンドイッチを一人ひとりに手渡してくれました。そしてさらに欲しい子にはいくつも…。

彼女は、一人ひとりの子にどれだけ与えるかをよく知っていました。

私は、いつも一つだけもらいました。それで十分でした。

ところで、私は敬虔なユダヤ教信者の家から来ました。でもここは非宗教的に運営されていました。

そんな中、コルチャック先生とステファ夫人は、一人ひとりの子どもにユダヤ教信者として毎朝お祈りをするか、宗教に関係なくするかを選択させました。

でも、すべてのユダヤのお祭りや祝日は大切にしました。

ですから、ある子は毎朝お祈りをし、ある子はしませんでした。<9:41>

お医者さんだったコルチャック先生は、子どもの病気を治したあと、またもとの悪い境遇の家に戻すことはよくないとの結論にたどり着きました。つまり、子どもは、精神的にも治さなければならず、教育も受けなければならず、精神の発達のために様々な状況を与えなければならない、ということでした。

コルチャック先生は、ここの孤児たちの家の仕事が授けられたとき、ユダヤ人の子ども病院や最も有名だった個人開業をやめました。

彼の信奉：子どもは人間である—が彼を導きました。<10:43>

つまり、子どもは大人と同じ権利を持つから、大人が持つ権利のすべての権利を子どもにも与えなければならない、という考えです。

ですから、コルチャック先生とステファ夫人の二人は、自由な美しい子どもの世界をつくりはじめた訳です。<11:12>

そうです。30年もの間、先生とステファ夫人は給料をもらっていませんでした。二人は本当のボランティアとして働いたのです。

ある時、ステファ夫人は私のところに来て、「イッチャカレ、あんたが絵を描くことが好きだって知っているのよ」と言いました。

その時、私はまだ10歳でした。「紙と鉛筆、筆、そして絵の具を与えてあげるから、すきな時に描いていいのよ」

それを聞いて、私は天国に昇った気持ちでした。<11:53>

ステファ夫人は、私が絵筆やそのほかすべてを持って好きな時に好きなものを何でも描いていいと言ったのです。それは本当に大事件でした。

でもステファ夫人がそう言ったのは、コルチャック先生もそれを知っていたからです。

私は本当に幸せでした。<12:20>

でも二人は決して私が何を描いたかなどチェックすることはありませんでした。

つまり、私が何を描こうとそれは私の権利であることを理解していたからです。すばらしことでした。

ところで、そのうちステファ夫人は、ここで先生をしていてイスラエルに移住したフィガル・リフシツと文通をはじめました。

彼女はその文通が大好きで、どんどんのめり込んでいきました。

● 1930年、彼女はイスラエルの地（当時パレスチナ）にフィガルを訪ねることを決意しました。

そして、彼が住むキブツ“エイン・ハロッド”に行きました。

戻った彼女は、そこのすばらしさをコルチャック先生に伝えました。

私の考えでは、多分、コルチャック先生も感動し、そこに行ってみることを決めたのだと思います。<13:42>

● 1934年、コルチャック先生はそのエイン・ハロッドにおもむきました。キブツの皆は、大手を広げて迎え入れました。

その頃彼は、シオニズムの考えがそれほど大きく大切だとは思いませんでした。

戻った彼は、そここのユダヤセンターで、イスラエルの地とキブツの生活をレクチャーしました。

彼にとって、これは開眼でした。それも何かをしなければならないとの開眼でした。

それまで気付かなかったことへの……。

● 1938年、ステファ夫人はここを辞め、イスラエルの地へ行き、キブツで働きながらコルチャックが来ることを待ちました。でも、彼は来ませんでした。<15:11>

● 1939年、私たちは、大変な戦争がここで起きるかもしれないという話を聞きました。

ですからステファ夫人は、このポーランドに戻り、コルチャック先生にパレスチナに移住するよう説得したのです。でも時はすでに遅く、二人はポーランドに残り、孤児

院を守ることを決意しました。<15:54>

そして私自身は、戦争が始まる一年前の 1938 年までこのホームにいました。つまり、15 歳になったらホームを出なくてはならなかったからです。

ところで戦争が始まったとき、子どもたちをどうするかの問題が起きました。

子どもたちを各自の家に戻すか、さもなければ、このホームに住ませ続けるか？

結局、コルチャック先生は、ホームに住ませることに決めました。

「子どもたちにはどこへもいくところがない。必ず路上にさまようだけだ」と彼は言いました。<16:34>

そして、ナチスがワルシャワに入って来たとき、ユダヤ人迫害がはじまりました。

孤児院もワルシャワ・ゲットーの中に移されました。

その移動中、ドイツ人たち、つまりナチスは、コルチャック先生がゲットーの中に荷車で運ぼうとしていた子どもたちの大切な食料のジャガイモまでを没収してしまいました。そして、ゲシュタポの将校たちは、なぜ医者でありポーランド人の彼がユダヤ人の子どもたちの心配をするのか聞きました。

「失礼ですが」と彼は答えました。「私はユダヤ人です」

「じゃあ、なぜ黄色のダビデの星をつけていないのか？」と聞かれたとき、彼は、自分としてはそんなものは認められない、と答えたのです。

そこでドイツ人たちは彼を逮捕して、拘留所に入れてしまいました。

ですから、コルチャック先生が勾留されている間、ステファ夫人がゲットーの中に見つけたわれわれの家の整理をはじめました。

でも、こんなゲットーに移されても、コルチャック先生の思想、教育、子どもたちはみな一緒に移ったのです。<18:14>

それは、先生やステファ夫人が持ってきたのではなく、私たち子どもらが持ってきたものです。

子どもたちは、このような地獄の中でさえ、自分たちの持っていたオアシスを捨てたくはなかったのです。

ヤヌシュ・コルチャックがクロドナの家に戻ったとき、すべては以前のようにになりました。でも、拘留所から戻った彼は、別人になっていました。

それは、そこでの体験が最後までつきまとうトラウマになっていたからです。

だから、彼は、ホームのすべての窓を閉じさせました。

そして 1 年後、ここの小ゲットーは閉ざされました。それはこの地区がアーリアン地区になったからです。ですから、皆はまた移動して、今度はまったく貧しい家に入れられたのです。<19:30>

またその頃には、もう 107 名でなく、200 名の孤児になっていたのです。

ステファ夫人とコルチャック先生は、どうにもならないかわいそうな子たちを加えました。彼らは、みなし児で、路上をさまよっていました。<19:57>

それで、私自身は、1939 年の終わり頃、ロシア国境へ逃れていました。

それは、弾圧と恥ずかし目を受けることに耐えられなかったからです。だって、自分は教育を受け、一人の人間の価値を持つ、誇りある人間だったからです。

1946 年の春、生き延びた私はすぐにクロムマルナ 92 の、あの自分の育った孤児院に戻りました。

それはまだ立っていました。しかし、そこはポーランドのクリスチャンの宿泊寮となっていました。

私はそこに入り、上階の大ホールに上りました。すると、そこで働いていると思われる女性が近づいてきました。

その人に自分が何者であるか、そしてコルチャック先生の生徒であったこと、また彼に何が起こったか知りたいことを伝えました。すると彼女は、ナチスが彼と子どもたちを列車に載せ、トレ布林カに送ったと言ったのです。<21:20>

トレ布林カは、殺戮^{さつりく}収容所なのです。

コルチャック先生と子どもたちが駅に向かったこの最後の路すじは、私から離れません。

そして、いつもいつも私の画の中に現れるのです。<21:40>

<イツァック・ベルフェルさんの画>

あのホームでコルチャック先生から受けた教育は、いつも私と一緒におります。

私は変われません。私はあの「イツァカレ」なのです。

これについて、コルチャック先生は何とおっしゃったでしょうか？

いま私は、89歳にもなっています。

コルチャック先生はもういません……

コルチャック先生が64歳のとき、ステファ夫人が56歳のとき、殺されたのです。

お二人は、いまの私より25-33歳も若かったのです。

でも、コルチャック先生の肉声や言葉はいまも聞こえます。すると、私もまたあの「イツァカレ」に戻るのです。

そしてもちろん彼がドクターで、……私より大きな彼は、私に言うのです。「多分、多分、そうたぶん君の画の仕事はあそこで君が受けた教育の結果なんだよ」と。

イスラエル海軍の上級将校として20年間勤めた息子は、退役したとき、こう言いました。

「お父さん、僕は技術者になりたくないし、経営者にもなりたくない。僕は人間の中の美しさに魅かわれているんだ」と。

そのときから今まで、彼はもう5年も教育者となっています。彼も、私も、うれしい限りです。それは、私にとって、自分の過去の表現だからです。

END